優秀賞

一人で生きていく大切さ

荒川区立第三瑞光小学校二年
竹谷　優里

やなぎだ先生、こんにちは。

わたしは、「はなちゃんのみそしる」というお話を読みました。なぜかというと、わたしとおなじ年くらいの女の子が、一人でおみそしるをのんでいる絵があったからです。

一ばん心にのこったことは、はなちゃんが元気のないお父さんのために、一人でおみそしるを作ってあげたことです。おみそしるの作りかたは、お母さんが教えてくれました。

はなちゃんのお母さんは、はなちゃんが五さいのときに、がんというびょう気でしんでしまいました。お母さんがしないように、はなちゃんがいっしょうけんめいピアノを聞かせてあげました。けれど、ピアノを聞かせて十日もたたないうちに、はなちゃんのお母さんはしんでしまいました。とてもざんねんで、かわいそうでした。でも、きっと、ピアノが聞けてよかったと、はなちゃんのお母さんも思っているはずです。

わたしも、はなちゃんとおなじように、かぞくをたすけたことがあります。お父さんにたのまれておふろそうじをやりました。そうしたら、お母さんが、

「おふろをあらってくれてありがとう。」

と言ってくれました。うれしかったので、たまには、かぞくを手つだうのもいいなと思いました。

わたしは、このお話でかぞくの大切さを学びま

した。はなちゃんのお母さんはしんでしまったけれど、いつもにこにこえ顔でがんばっているはなちゃんのすがたが、とてもいいことだなと思いました。生きものは、かならず、いつか、しんでしまいます。それも、いつ、だれが、どこで、しんでしまうかもわかりません。だから、これからは、そういうときのために、いえのことをいっぱい手つだったり、自分でできることは、なるべく、自分でやるようにしたいです。そして、はなちゃんのように、いつもにこにこえ顔でいたいです。

～柳田邦男先生からのメッセージ～

絵本『はなちゃんのみそしる』は、かなしいけれどかんどうするお話ですね。

はなちゃんのお母さんは、はなちゃんがまだ五さいのときに、がんでなくなってしまったのですね。でも、お母さんははなちゃんがひとりでもおみそしるをつくれるように、なくなるまえに、おみそしるのつくりかたをおしえてくれたのですね。

はなちゃんは、お母さんがなくなるまえに、ピアノをひいて聞かせてあげたり、お母さんがいなくなってからは、お父さんにみそしるをつくってあげたりしました。

竹谷さんは、この絵本を読んで、かぞくの大切さや、かぞくを手つだうことのよさを学んだという。そして、じっさいに、お父さんにたよるだけでなく、お父さんにたのまれて、おふろそうじをしたのですね。しかも、これからは、いえのことをいっぱい手つだったり、自分でできることは、なるべく自分でやり、いつもにこにこしているよ

うにしようとかんがえるようになったのですね。
本を読んだら、かんどうしたことを、自分はできるかな、自分はどんなことをしようかなとかんがえることが、たいせつです。竹谷さんは、そういうことをしっかりとかんがえたところが、とてもよかったです。